

聖書:創世記23章1~20節

説教:死んだ者を葬る

はじめに

毎年五月の第二週目に、先に亡くなられた方々を思い起こす召天者記念礼拝を行っております。どうしてこの季節に行うのか、その謂われについてお話しします。かつてこの教会に桜が大好きな中本亀子姉という方がおられ、姉は信仰の大先輩として、私たちにいつも天の御国の希望をしっかりと語り励ましてくださいました。その中本姉がこの教会の最初の召天者となられことで召天者記念礼拝は桜が咲く季節に開くようになった次第です。

皆さんも身近な方々を亡くして天に送ったという経験をお持ちであろうと思います。家族が亡くなれば、すぐに葬儀の細かな打ち合わせが始まり、愛する人を失ったという悲しみにふける暇もありません。葬儀が終わっても、今度はお墓のことで悩みが続きます。

今日開いている創世記23章には、アブラハムの妻サラが亡くなったとき、どのような手順で葬っていったのかが書かれています。このことが私たちにどんな意味を持っているのかを考えてまいります。

1 アブラハムとサラの生涯

1) 神から召し出されて

まず、アブラハムとサラの二人の生涯について簡単に振り返っておきます。今のイラク共和国にユーフラテス川という有名な川が流れていますが、その下流に昔ウルという町があって、二人はそこ出身であるといわれています。

そんなアブラハムにあるとき神はこう語ります。「あなたは、あなたの土地を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」(12章1節)このことばにしたがってアブラハムは出発をいたします。一族郎党を従えておそらく数十人から百人規模の旅です。目的地は教えられていません。とにかく西へ西へと向かって、カナン地、今のイスラエルの国にあたりますが、そこへたどり着いた。そこが約束の地であると神は教えてくださり、こうしてアブラハムはカナン地に住むようになったのですが、そこから波瀾万丈の人生が始まります。二つだけ挙げます。一つ目。サラが美人だったので、王さまが来て絶対自分を殺して奪うに違いないと不安になる。そこでどうしたか。これは妹ですと言って、自分から王さまに差し出してしまふ。そういうことを二度

もする。もちろん後でばれてしまって大問題になる。美人の奥さんをもらうと苦勞が絶えないと言って笑ってられない。考えてみればひどい夫です。大変な夫婦けんかになったのでは心配するのですが聖書には書いていません。

二つ目の問題は、二人になかなか子どもが生まれなかったことです。日本でも江戸時代のころ、殿様に男の子が生まれなければお家断絶になってしまう。そうならないように、側室を迎えてでも男の子を産ませることをしたそうです。アブラハムもサラも、最後はイサクという男の子を授かるのですが、それに至るまで散々苦勞していきまふ。

2) 墓を買い求める

そんなふうにも苦樂をともにしてきた妻サラが、百二十七歳で亡くなります。2節に「アブラハムは来て、サラのために悼み悲しみ、泣いた」とあります。

ときどきこんなことを言われることがあります。「仏教では死んだ人を大切にすけれど、キリスト教は違うんでしょう」とか、「クリスチャンは死んだら天国に行くことが決まっているから、死んでも泣いたりしないんでしょう。」

今日の所を読めば全部答えが書いてある。アブラハムはクリスチャンです。サラは天国に行けると堅く信じていた。それでもサラが亡くなったときは、悲しくて泣きました。愛する人が亡くなったら悲しい。当たり前な感情です。天の御国で再会できるという希望を持っていても、しばしの別れは誰にとっても辛い。悲しかったら泣きます。泣いたから信仰が弱いとかそんなことを言う必要はないのです。そしてもう一つ。アブラハムは、この後サラを葬るために墓を用意している。キリスト教では、死んだ者を粗末にすとか大事にしないというのは間違いだということはこれで分かる。

さて、その墓のことです。実を言うと、アブラハムは自分の土地を持っていない。カナン地に來てからずっと借りた土地で家畜を飼って一族を養っていた。アブラハムは外国人なので土地を売らないと言われわけではない。お金がなかったのでもない。6節では、「あなたは、私たちの間にあつて神のつかさです。私たちの最上の墓地に、亡くなった方を葬ってください」と言っている。アブラハムは地元の人たちから一目置かれて尊敬されています。土地を買おうと思えば買える位の財産もちゃんと

ある。それなのにどうして買わなかったのか、そのことはまた後で触れることにします。

当時、不動産屋とか土地の権利書などという制度はない。それで、町の集会所に主だった人たちを集めて皆が聞いている前で話し合いをして土地の売買をしていきます。交渉の結果、エフロンという人が持っていた土地を銀四百シケルでアブラハムが買うということで交渉が成立いたします。

2 神

1) 約束

皆さんもお墓のことで考えている方もいらっしゃるかも知れません。自分が死んだらどの墓に入るか。墓がないので死ぬ前に買っておくべきか。いや、子どもたちに迷惑をかけたくないで共同墓地のような所に入ろうと考える方もいます。どんな形であろうとも、とにかく墓は大切だと思っている。ですから、アブラハムも妻のために墓を買うのはあたりまえと考えるでしょう。

しかし話はそう単純ではない。というのは、アブラハムに子どもが生まれず、天幕の中で眠れぬままに悩んでいたとき神がこう語ったのです。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。」(15章5節) 続いてこうも語る。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」(15章7節) アブラハムはこの約束を聞いて、土地は神さまが最も良いときに自分に与えてくださると信じました。だから彼は、ずっと自分から土地を買うことは考えなかった。

2) 神は約束違反したのか

でもサラが亡くなりました。さすがに亡くなった者をそのままにすることはできません。墓に葬る必要があります。そこでアブラハムは、地元の人たちと交渉して土地を買い求め、その土地にあった洞穴にサラの亡骸を葬ることにします。

実を言うとアブラハムが生きている間に自分の土地として手に入れたのは、このマクペラの畑地と洞穴だけです。皆さんはどう思われるでしょうか。「わたしは、この地をあなたの所有として与える」と言われたのに、結局、自分でわずかな土地、それもお墓ですが、手に入れただけで死にました。ある人は言うでしょう。「アブラハムは、ありもしない神を信じていただけだろう。」あるいは、「神は心変わりして約束を破ったのだ。」そう言われてもおかしくない。もし本当にそうであれば、私たちは神を信じることはできません。

3 神のご計画

1) 神が真実な方であるならば

もちろんそんなはずはありません。神は真実な方ですから、アブラハムに語った約束は必ず果たされるはずで、いったいいつ果たされるのか。アブラハムは死んでしまったのではないか。解決方法は一つです。そのことがヘブル書11章19節に書かれています。「彼(アブラハム)は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。」

約束のものをこの地上で手にしないまま死ぬことになったも、全然がっかりしない。なぜか。神は私たちをよみがえらせてくださるから。死からよみがえらせていただいたときに、約束が果たされるから。

それはよいでしょう。でも、神はほんとうに死んだ者をよみがえらせることができるのか。もしできなければ、アブラハムはだまされたこととなります。

2) イエス・キリストのよみがえり

もちろん私たちは知っています。イエス・キリストは十字架で死なれたけれど、三日目によみがえられた。この方が神の子であったので、そういうことができたと思うかもしれない。そうではありません。この方は完全に人間と同じになりました。自分を救う力もあつたけれど、全部十字架でお捨てになった。でもただ一つ捨てなかったものがあつた。信仰です。父なる神は信じる者をよみがえらせてくださるという信仰は最後まで捨てない。その信仰によって、イエスは死からよみがえることになりました。それと同じことが私たちにも起こる。アブラハムはよみがえりを信じていました。だから、土地を手にしなくてもがっかりしません。

3) 天の御国に墓はない

最後にひとつだけ触れておきます。サラが亡くなったとき、アブラハムはどうして自分で土地を買わなければならなかったのか。神にとって死んだ者はどうでも良いのでしょうか。そんなことはありません。今日の箇所にも神は働いています。人々はアブラハムを尊敬して、「亡くなった者を葬ってください」と丁寧に応じています。神の支えがあるからこう言ってくれる。

でも、神が死んだ者にも寄り添う方であるのなら、どうしてお墓にする土地を与えなのか。こう考えたらどうでしょうか。神はアブラハムにカナン

の地を永遠の所有として与えると約束しました。一方、神は死者をよみがえらせる方でもある。そうするとお墓はどういうことになるのか。私たちにとってお墓は今が必要です。でも、よみがえりをいただいたときには、死んだ者はもういなくなるのですから、お墓は必要ない。言われてみれば当たり前のことですが、そうなる。だからアブラハムはお墓を神から与えられるのではなく、自分のお金で買うという方法をとられる。

私たちは、これから数年をかけて教会の墓地を買い求めたいと願っています。しかし、天に召された者が永遠にその墓で眠るではありません。やがて私たちは死のない天の御国へと移されます。天国には、墓はありません。先に召された方々とまた再びまみえることができる。

そのような約束を神が語っておられることをまた信じて歩んでまいります。